

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一12:4~11 「御霊の賜物」

[4-6] 「さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です」

ここでパウロは御霊の賜物の多様性を教えている。彼がこのように言う背景には、おそらくコリント教会の一部の人々が自らの賜物を誇っていたからだと思われる。パウロはそのような人々に対して、その態度が根本的に間違っていることを示す。御霊の賜物にはいろいろあってもそれらは同じ御霊によるのであって、お互いが優劣を競ったり対立するためではない。4節で賜物、5節で奉仕、6節で働きと並べられ、それにはいろいろの種類があると続くが、これは実際にはひとつのことを三つの面から見た表現だと考えられる。いろいろな賜物はいろいろな奉仕に用いられ、いろいろな働きになる。さらにこの4~6節には御霊、主、神と三位一体の神がはっきりと表現されていることも知っておかなければならない。

[7] 「しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです」
御霊の賜物は教会全体の益のために用いられることを目的として与えられている。おのおのに御霊の賜物が与えられているという事実こそ教会を生命にあふれたものとする原動力であり信仰者一人一人の生きた結びつきを支えるものである。

[8-10] 「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています」

ここには九つの御霊の賜物があげられている。またローマ 12 章には別の賜物のリストがある。パウロはここではコリント人たちの問題に当てはまるような賜物を上げていると考えられる。①知恵のことば…霊的知恵を伝えることば。「知恵」とは神との交わりから生まれてくる神ご自身に関する知識。→箴言 3:13~20 ②知識のことば…知恵を実際の生活の場で実践するための知識を伝えることば。「知識」とは特定の状況において何をなすべきかを知る知識。③信仰…特別な奉仕を遂行するための力ある信仰。④いやしの賜物…病気がいやされる。⑤奇跡を行う力…悪霊追放等の力あるわざ。⑥預言…神の思い、意思、計画を知り、人々に伝える役目。⑦霊を見分ける力…霊的識別力、判断力。⑧異言…恍惚とした意味不明のことば。その内容は賛美や祈りに関係があるようである。(Iコリント 14:14-15) ⑨異言を解き明かす力…人々に理解できるように解き明かす力。

[11] 「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです」

七色の虹ももとはひとつの光である。ある賜物を持っている人が別の賜物を持っている人のことをとやかく言うことはできない。同一の御霊がみこころのままに賜物をお与えになり、教会のために活用するようにと願っておられる。御霊の働きこそ、現に教会を教会としている原動力である。

私たちは自分に与えられている賜物を自覚し、それを教会のため、他の人のため、神の栄光のために有効に用いていかなければならない。